



ヴェンゲン村 1274m からユングフラウを仰ぎ見る（左）。メンリッヘン山頂 2343m から眺める左からアイガー 3970m、メンヒ 4107m、ユングフラウ 4158m のベルナーオーバーラント三山とシルバーホルン（：ユングフラウに隣接）の景観（中）。小生が愛する純白のシルバーホルン 3695m を望遠撮影（右）

メンリッヘンから南へ、クライネ・シャイデックまで下る散策路は、[難易度 1、体力 1] 評価の容易なコース。正面にアイガー、メンヒなどを眺めつつの散策路で、自身懂れていた。ロープウェイで手軽に稜線に上がれることも幸いし、国内旅行者のトレッキングツアーにも組み込まれる。

現地の週間天気予報を基に、2015年6月29日（月）に出かけることにした。スイスパスが使えるので、グリンデルワルトの反対側に位置するヴェンゲン村へ移動した。ここで、バスを見せて半額で稜線へとゴンドラに乗って上がる。グリンデルワルトからも上がれるが、ヴェンゲンから上がるルートが格安になることで決めた。

ホテルの朝食は 6:30 開始だが、日々、若干早めに会場に降りて、アイガーを窓越しに見ることが出来る“指定席”に、7日間連続で座した。窓からの雄大な景観が朝食を脚色してくれたのは幸い。



Station/Stop	Time	Platf./ Edge	Travel Comments
1034m Grindelwald	dep 08:19	1	Regio 230 Direction: Interlaken Ost
652m Zweilütschinen	arr 08:41	2	平均 17.4m/1分 の下り
Zweilütschinen	dep 08:46	3	Regio 145 Direction: Lauterbrunnen
795m Lauterbrunnen	arr 08:55	3	平均 15.9m/1分 の登り
Lauterbrunnen	dep 09:07		Regio 345 Direction: Kleine Scheidegg
1274m Wengen	arr 09:21		平均 34.2m/1分 の登り

Duration: 1:02

この日はグリンデルワルト（Grindelwald 1034m）8:19 発に乗車し、インターラーケンの二つ手前（Zweilütschinen 652m）で乗換えて、ラウターブルンネン（Lauterbrunnen 795m）へ。全線アプト式の登山鉄道であるヴェンゲルンアルプ鉄道（Wengernalpbahn; WAB）に乗り換え、9:21 ヴェンゲン（Wengen 1274m）着の旅程。

グリンデルワルトやラウターブルンネンとインターラーケンを結ぶベルナーオーバーラント

鉄道（BOB）は急勾配区間ではアプト式で、それ以外は通常レールを快走する。アプト式に切り替わる際には極端な低速になることで分かる。一方、WABは全線がアプト式。勾配を比較した。BOBの平均勾配の約2倍の急勾配をWABは登り下りする。WABで体感した急勾配は計算上からもうなずけた。

ヴェンゲン村は、スイス政府観光局HPに「ラウターブルンネン谷を見下ろすテラス状になった山の台地にある」と記されているが、その通りの景色が俯瞰できる。とくに、駅からの至近地に教会があり、この裏手が展望所となっており、立ち寄って実感できた。メンリッヘンへ登るロープウェイ乗場は両者のほぼ中間地点にある。実際の行動は、まず乗場に赴き、スイスパスを提示し、「One way!」を告げて、半額の11CHF（スイスフラン；決済額は1,493円；1CHF≒135.7円）でチケットを購入し、乗車する時刻（催行日は20分毎；盛夏は15分毎の運行）を確認した後に、教会の展望所へと寄り道をした。

ロープウェイは稜線駅（2230m）まで、所要5分で約950m登る。景観はどんどん変化し、感動が大きい。ヴェンゲン村の家々がどんどん小さくなり、崖下・谷底のラウターブルンネンの家並が見え始め、米粒大に見える。教科書で馴染みのU字谷のラウターブルンネンの谷の全容と、谷に約300m落ちるシュタウプバッハの滝も見下ろし、目を上にやれば、ユングフラウなど氷河に被われた雄大な山並みが視界に入る。

稜線に上がり、しばし大パノラマの景観に見惚れた。一方、足元の高山植物に目を留め、環境に浸った。

一息ついた後、歩を頂上に向けた。前情報が皆無で、登りながら気づいたのは、真新しいベンチがあり、背もたれに「Männlichen Royal Walk」と刻印されていたこと。かつ、頂上に近づいてやっと気づいたことだが、展望台が新しく、王冠の形状であった。調べたら、2015年夏季からで、つまり、整備されて間もないメンリッヘンの《Royal Walk》だと知った。



下山時に目にした情報



メンリッヘン山頂には王冠の形をした展望台が設けられ、道中はロイヤル・ウォーク（左）。山頂から見たラウターブルンネンのU字谷と、映画007のロケ地として知られるシルトホルン山頂の展望レストランを望遠撮影（中）。北側にはシーニゲプラッテがあり、これも望遠撮影し、ホテルレストランを強調（右）

山頂まで時間を費やし、かつ、山頂でもゆっくりし、新たに購入したカメラに三脚を付けて、望遠撮影を楽しんだ。その最中、日本人が次々登って来る様子を垣間見た。小生は挨拶程度で、カメラに向かい、ヒロさんが話しかけられ、日本語の会話が聞こえていた。ふと気づくと、日本人は我々だけになっていた。

何故？素晴らしい場所であり、ゆっくりと身を置いて良かろうに…と思った。しばらくして気づいた。日本の旅行者によるハイキング・トレッキング主体のツアーだと。きっと、グリンデルワルトから小型のゴンドラに乗り、メンリッヘンの稜線に登り、ここからクライネ・シャイデックまで下るコースであり、ツアーガイドさんは「健脚の方は、山頂への往復もどうぞ！」と話していたのかも知れない。

確かに、HPには「高低差 113m、距離 800m、所要 30 分」の記載がある。が、これは身長が高く、下肢の長い西欧人向けの情報 ([www.maennlichen.ch/](http://www.maennlichen.ch/)) であり、われわれのように、高山植物に目を留めてしゃがみ込み、立ち止まっては山並みを眺めつつの登りでは数倍の時間を費やすことになる。

われわれは、メンリッヘン稜線駅から山頂往復までで約 3 時間を費やしていた。その後に、クライネ・シャイデックに向け、またもや停まりつつ、呑気に歩いた。結果、想定外の時間を費やした。



高山植物に囲まれたロイヤル・ウォークと真新しいベンチ(左)。界限には黄色の花が目立った。黄色い高山植物の種類も多い。拡大した花は、左からツシラゴ・ファルファラ、アルペン・ヴンドクレー、ゴルト・フィンガークラウドかもしれない(中)。ヴェンゲン村、ラウターブルンネンのU字谷を背景とした自画像(右)

メンリッヘン山頂界限で撮影した写真は、本稿では、7月2日(木)の撮影分も含まれる。

① スイスパスを活用した気紛れ的な行程だったこと、② 前日に「4湖巡り」をしたこと、③ 翌日に「3つの絶景峠をポストバスで巡る旅」を計画したことがあり、④ また山に登りたくなった感覚があり、6月29日に次いで(中2日での)訪問となるが、遠慮がちにヒロさんに気持ちを話したら、即答的に「Yes!」の返答があった。結局、二人ともメンリッヘンに魅せられ、虜になっていた…。

高山植物は多様で、調べると亜種も多々あり、結局、諦めた。

私事、オペラを愛好するようになり、心惹かれるアリアも実には多くなった。が、アリアの名称は、多くが邦訳された曲の冒頭の一部で名づけられており、ほぼ覚えていない。しかし、演出・舞台・衣裳は千差万別だが、オペラのどのシーンで、どんな心情で歌われるアリアであるかは分かる。そして、心をときめかせている。一例として、プッチーニの〔ラ・ボエーム La Bohème〕第一幕の後半で、貧乏学生のロドルフォがお針子のミミに出会い、fall in love! つまり、一目惚れで、かつ、命がけの恋に落ちるのだが、その際、互いが自己紹介をするアリアのメロディーラインには、年齢 65 歳を過ぎた今でも、心と

きめく。ロドルフォとミミが相次いで歌うアリアの名・歌詞は今でも曖昧模糊。覚える気もない。

これに似たようなことだが、メンリッヘンなるオペラに彩りを添える高山植物を可愛いアリアに例えると、アリアの名は知らない。が、各々がステキだ。飽きることはない。

勿論、好天に恵まれたことは大きな要因。そう、オペラなら本会報に連載した《ウィーンを愛して》(No.401-6 ; 2002年9月-13年7月)のウィーン国立歌劇場に例えることも出来ようが、本場・本拠地での視聴は、来日公演(：高価で体験出来ないでいる!)とは比べることが出来ない。

メンリッヘンにおいて、青空、ベルナーオーバーラント三山を始めとした360度の雄大な大パノラマを舞台・大道具として、群落を成して咲き誇る高山植物さんたちが演じ、歌う・・・。

とても、小生の文才では描けない。高山植物さんたち各々の写真が自ら物語ってくれよう・・・。

時間にしばられず、気儘にメンリッヘンを堪能した事実に感謝し、公務がこなせている今がある。今後も、機会があれば、メンリッヘンには欠かさず登り、身を委ねたいと願う。そう、恋に落ちた人生・・・。

きっとアナタもメンリッヘンで恋に落ちる・・・。



エンチアン、アルペンローゼなど、初夏にメンリッヘンで出会った高山植物